

Silverfish の ごとく 40 年

門 司 正 三 (植物)

昭和9年ごろは、大学は不親切で、入学許可の通知はうけたが、いつでてもないでなかった。植物園の教室で、4月半ばに講義がはじまったが、5月になると、現在の二号館への引越して、新入生も図書をしぼったり、トラックに積込んだりの奉仕をした。移転は一応6月に終り、7月はじめ日光へ、新任助教授の本田正次先生指導の分類学野外実習にでかけ、宿でビールの御馳走にあずかった。分類学教室は、腊葉室の乾燥をまって翌10年9月植物園から移転してきた。

植物系統学では、Spermatophyte (種子植物) に精虫があるかないかは、大問題であったが、1895年、教室助手の平瀬作五郎氏 (画かきさんであったという) が、植物園の大イチョウで動く精子を発見した。植物の研究には、生の材料が身近にあって常に観察することが必要であり、植物学教室が植物園にあることによって、この大発見がなされたものと思っていた。しかし、実は、植物学教室が、本郷から植物園に移転したのは、精子発見の翌々年の明治30年夏であり、平瀬さんはせせと銀杏の青い実を採りに炎天下をかよったのであろう。トウダイもとクラシの例のごとく、案外植物園に定住すると、材料になれすぎて、発見できなかったのかもしれない。科学にはなれは禁物である。この4月から、植物学教室と植物園との話し合いで、植物園を系統・分類学研究のメッカにしようという計画が進んでいる。研究者は、いつも三四郎であってほしい。

さて、この精子について、一つの話がある。ずい分前のことであるが、大学本部の外事掛の女の方から電話で、「英文の大学カタログの The Ginkgo のなかに sperm という語が使っているが、このようないがらわしい語を大学のカタログに使用するのほめてほしい」というきつい抗議がアメリカの婦人からでているので、何とかしてほしい」との話があった。こちらもいろいろしらべて、spermatozoid という植物学用語とかえてはと返事をしておいた。あれから、およそ10年、時代もかわったものである。また、植物学教室が植物園に

あったことによって、R. Koch (1908. 6. 19), Albert Einstein (1922. 10. 20) などの署名が教室秘蔵の Guest Book についている。

最近、ユネスコの MAB (人間と生物圏) 計画の調整理事会で、西独代表の Staudinger 夫人 (ノーベル化学賞 1953 年受賞者 Staudinger 博士未亡人) と親しくなった。彼女の専門をたずねたところ、植物生理解剖学を、Prof. Haberlandt に学んだという。小生の恩師である中野治房教授は、日本で数すくない Haberlandt の弟子であり、ベルリンでソラマメの子葉の再生を研究された。この仕事は今日では発生学の分野にはいるのであろう。

不肖の弟子は、研究の幅がせまく、中野先生の研究のほんの一部しか、つぐことができなかつた。しかし、先生の潮沼学は都立大の宝月欣二教授、教育大の市村俊英教授に、群落学は千葉大の沼田真教授に、生長素関係は教養学部八巻敏雄教授に、また泥炭の研究は地理の坂口豊助教授によって、うけつがれている。発生の仕事は、全く別途に古谷雅樹教授によって発展されている。小生は Haberlandt の生理解剖学の手法を、集団レベルにあてはめたが、その微細構造を使って群落光合成の理論式を組立てて植物生産の基礎をきずいたのは、当時後期学生であった佐伯敏郎助教授である。

また、植物生理解剖学の一つとして、ダイズの莢の X 線写真を、中期のときに講義をぬすみ聞きした寺田寅彦先生の弟子の平田森三先生指導で、物理学教室でとらせていただいたのは 1941 年の夏であった。これは平田先生の学位論文の審査を教授会で聞かれた中野先生が刺激をうけて、小生に命ぜられたものである。さらに、この仕事をするにあたって、セルローズミセルの排列方向を知るため地質の坪井誠太郎先生の教えをうけた。学問とは食物網 food web のごときものである。

その他いろいろな方のおかげによって、紙魚のごとくつぶされもせず 40 年間無事に過ごすことができたことを深く感謝して筆をおく。